第三回　平成二十八（二〇一六）年六月十八日

占領下西宮の接収住宅・接収施設について

玉田　浩之（たまだ・ひろゆき）

大手前大学メディア・芸術学部の玉田と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。今日は、「占領下西宮の接収住宅そして接収施設」と題してお話します。まず東京の話をさせていただいてから、地方都市の状況を考えてみたいと思います。

簡単に自己紹介をしておきます。これまでアメリカの近代住宅の歴史をテーマに研究しておりましたが、最近になって日本にも関心を持って調査研究に取り組んでいます。博士論文では、カリフォルニアの建築家の思想を研究し、戦後の建築思潮の流れをまとめさせていただきましたが、そこから派生して、日本とアメリカがどういう文化的な交流、あるいは衝突があるのかということに関心を持つようになりました。例えば、アメリカ西海岸は日本の文化の影響が強い場所とも言われていますが、戦後になると逆に、日本がアメリカから強い影響を受けるという面もありまして、その影響が行き来するところに関心があります。その辺りを調べてみたいということで「占領期日本」というテーマで建築と都市を調査しております。最初は京都のことを調べました。京都についてはまとめたものがあるのですけども、それ

については話す時間がございましたら、お話させていただくとして、今日は東京の状況、それから阪神間地区、西宮周辺の状況についてお話ししたいと思います。

それでは、まず占領期の日本のお話をさせていただきます。太平洋戦争に敗れて、一九四五年八月に我が国の状況が一変します。戦時下の日本は、物資の少ないなか、ただ耐えしのぐというような状況で、当時の建築に関する状況といえば、ほとんど建築物が建たない時期でした。そのなかに占領軍が入ってきます。その時の驚きといいますか、急変する様は想像を超えるものがあったと思います。まずポツダム宣言を受け入れて連合軍の進駐が開始されます。つまり我が国が連合軍総司令部の占領下におかれるということですが、占領というのは民主主義、あるいは軍国主義を排除するというような目的をもって入ってきます。今日は、民主主義の中身については深くは立ち入りませんけれども、そういう大きなテーマを持って占領が開始されるというのは皆さんご存知だと思います。一九五二年になってサンフランシスコ講和条約が結ばれて、日本の主権が回復する。沖縄を除いてですけれども、そういうような状況になります。ここで扱う範囲は一九四五年から一九五二年の7年間です。この時期を占領期と呼ぶことにいたします。

この図は、『GHQ』(岩波新書一九八三)という本を竹前栄治先生のご著書から拝借したものです。これをみれば、全国にどれだけの部隊がどのように進駐していたのかということがわかります。大きく分けて二つの軍隊がありました。横浜が中心の第八軍、そして京都を中心とする第六軍です。大きく、西日本と東日本に分けて考えるとわかりやすいかもしれません。

西日本の最初の中心は京都にありました。第六軍の本部が四条烏丸というところにありました。現在、四条烏丸に「COCON KARASUMA（古今烏丸）という建物がありますけれども、あそこの建物が、いわゆる西日本の本部だったんですね。東日本のほうが先ですが、横浜にマッカーサーが入って、そこからグランドホテルを1つの拠点とし、その後、東京に本部を構えるような状況になっていきます。実は西日本の場合はオーストラリア軍などが呉に進駐していまして、アメリカ軍だけではないんですけれども、様々な部隊が各地の占領を進めていく。アメリカが中心なんですけれども、場所によって違いがあるということです。現在、この占領下の状況を調べようということで、北は北海道から、西は九州までチームで調査をしているところです。ちょうど私と、関西在住の先生たちがこの周辺を少し調べています。地方によってどういう違いが出てくるのかということについては研究途上でございまして、その辺りについてはゆくゆくは発表していこうと思っております。

それから、兵庫県の状況ですが、一九四五年十二月の時点ですが、どのくらいの人数がここに来ていたのか、どのくらいの数の占領軍が来ていたのかというと、兵庫県だけで一万五八〇〇人ほどです。その後、どんどん増えていきます。途中から部隊が入れ替わったり、移動したり、ということがあって増減はありますが、それなりに大きな数字です。地方都市の中でも多いのは、やはり軍港を構えていた長崎です。それから青森、北海道も多いですね、それから神奈川が多く、広島もそれなりの数字です。そういうような規模で占領軍が入ってくるということです。

ところで、建築だけではなくて都市がどう変化しているのかということを研究する学問分野に都市史

があります。都市史の分野から見ても占領期は興味深いと思います。占領というのは都市にとっては大きなインパクトをもたらすからです。占領とは、日本の法律とは違う動き方をするもう一つの法律が存在することを意味します。それらは都市にどういう影響があるのか、影響をあたえていないとすればどこがそうなのかなど、調べていかないといけない。このような意識でもってこの研究を進めています。外国の人がやってきて、建物を取り上げて改修したり、新しいものを作ったりというようなことが行われるので、そこの部分はもう少し詳しく見ていきたいと興味を持つわけです。

昭和二十一年二月の時点でＧＨＱ関係者は四十一万人です。東京だけでも四万五千人いたと言われています。これだけの人が来ると、住む場所が必要です。なので、住宅を接収したり、新築をしたりということが行われていきます。もちろん、働く場所も必要なので、それに伴ってオフィスビルだったり、必要な施設は接収されていきます。建物だけじゃなくて、土地を接収することもあります。それは荷物を置いたりするような場所、資材の置き場所として、あるいは車の置き場所として接収する場合もあります。そのほかにも、レクリエーションを目的とした接収もあります。この辺りはまだ十分に踏み込めてはいないんですけれども、占領軍が外国にやってきて、余暇をどういうふうに楽しんでいたのかというところは興味を引くところです。そのようにして、占領軍が都市に介入してくる。そして、それが日本の既存の法律とは違うかたちで動くため、様々な軋轢を生んで行きます。

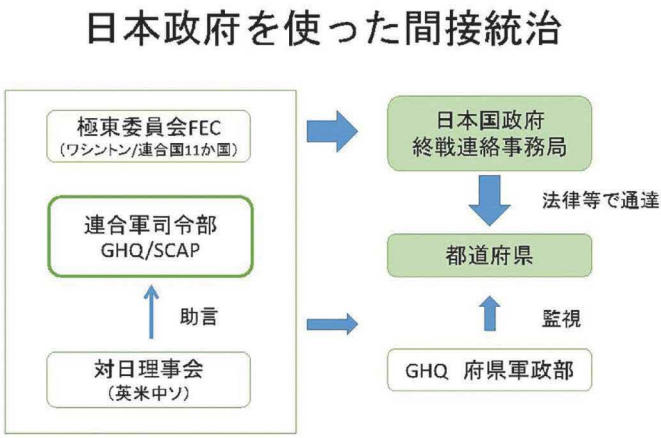
具体的にどんなものが接収されたかのでしょうか。まずは軍事施設です。軍事機能を解除する目的で、当然ながら軍港となっていた港湾施設等が接収されていきます。それから基地です。元々軍隊がいた場

所は接収され、占領軍のキャンプや基地になっています。それからオフィスです。先ほど、京都の例を挙げましたが、司令部となっているところは大きなオフィスが必要なので、オフィス空間を持つビルをまるごと接収することもありました。それから倉庫と駐車場なども兵站機能を確保するため接収されます。たくさん接収されている時期もあれば、すぐに接収解除になることもあります。それから住宅系ですね。仮の住居としてホテルが真っ先に接収されます。占領軍がホテルを宿舎として使うということがありました。場合によっては社員寮なども接収し、そこに兵隊が入るということもありましたし、一部、学校の空間を改修して宿舎に使うということもありました。それから、アパートです。すぐに居住できるような住宅施設が接収されていくことになります。

既存建物の接収以外に、占領軍が取り組んだのが住宅の新築です。接収は既存のものをどうやって使うかという問題になりますが、それに対して、新築はどうやって作るかという話になります。この二つ、分けて考える必要があります。まず、あるものをうまく活用するという方向で話は進みます。しばらくして、軍隊の家族を呼び寄せることが行われるようになると、それに合わせて住宅をもう少し大きなものを確保しないといけなくなります。この結果、住宅地区を新築していくことになりました。これを「占領軍家族住宅」と呼びます。「ディペンデント・ハウジング」と呼ばれたりもします。その中には学校やスーパーマーケット、教会など、いわゆる都市の機能のほとんどをそこで充足できるように、場合によっては劇場もあるところもありますし、野球場やアメフトをやるような場所みたいなものも用意されているところもあります。わかりやすい例で言いますと、東京のワシントンハイツです。今は代々木の国立競

技場がある場所ですが、そういうところが新築場所として利用されていました。

ここで、ＧＨＱの命令指揮系統を考えておきたいと思います。ＧＨＱの指示がどのようにして伝えられるのかというところですが、間接統治というシステムが採用されたことで知られています（図１）。ＧＨＱの中心があって、極東委員会や対日理事会、いろんなメンバーの意見を受けつつ、ＧＨＱ／ＳＣＡＰが日本の終戦連絡事務局に指示を出します。それを今度は都道府県が受けて、都道府県の庁舎内に置かれた軍政部に通達を出し、所有者に伝えられるという指示系統になっています。接収のプロセスは、基本的には都道府県が調査をしたものをＧＨＱが調べて、それでもって、接収するか、解除するかの判断をしていたようです。指示系統上はそうなっています。ジープで建物を物色して、すぐに出て行けというようなこともなかったとは言えないんですが、それは最初期の頃のみだの



マッカーサー元帥の指揮のもと、政策立案部門のGHQが発する指令を日本政府が実施するという間接統治がなされた。指令の実施状況はGHQの下部機構である地方軍政機構が監視した。

図１　間接統治による司令通達の流れ

出来事と聞きます。

どういうふうに建物が接収されるのかについてですが、これは京都の住宅の場合です。この指示書には、住人は四十五日以内に立ち退くこと、ということが指示されています。そのあと、これだけの項目について改修しなさいというようなことを指示で出してきたりします。立ち退きは、オフィスビルは三日以内に退去せよとか、非常に期間が短かったりするんですが、住宅の場合、そんなにすぐに出て行きなさいと言われることはほとんどありません。立ち退きと言っても、同一建物に同居するタイプと、完全に出ていくタイプがあります。このような文書で通達が行われました。文書は英文で県や府に届いて、それを翻訳し、所有者に伝えるという流れになっていました。

接収建物でよく知られているのは、GHQ総司令部があった東京・丸の内の第一生命ビルです。これは一九三八年に竣工した建物です(図2)。GHQはどこをどういう理由で接収したのかという問いは、すごく興味深いのですが、その意図を読み取ることはなかなか難しい。丸の内に限ってはオフィスビル街だったので、広範囲に接収しています。そのうちの一つ、明治生命ビルは日本の洋式建築としては最高傑作と言われているようなものでしたし、日本郵船ビルや聖路加病院など、建物として評価の高いものを接収していたことがわかってい

図2　GHQ本部（第一生命ビル）

ます。

連合軍は記念日にパレードすることがあったのですが、ちょうど第一生命ビル、ＧＨＱの本部があったところは皇居の前をパレードしています。皇居の中に皇居前広場というのがあるのですが、そこに写真のようなパレードをやっていました。そのパレードの仕方、軍隊の方向というのが天皇の皇居とは逆の方向を向いていて、非常に政治的な意味を持っていたんではないかと指摘している研究者もいます。皇居に対峙するような場所に、そういう接収の建物が東京の場合はありました。そこに本部があったということになります。これが皇居前広場の様子ですけども、隊列の向きが皇居から丸の内のほうに向かって列を組むというようなかたちです（図３）。日本の象徴的な場所を占領軍が利用するというかたちになるので、なんというか、微妙な接点をもつ場所だったと言うことができます。

米軍は独自に日本の地図を作り、占領軍関係の建物の位置を記載していることもありましたので、それを見れば当時の様子を知ることができます。建物によって接収期間は異なります。物によっては接収が解除されたり、入居していた施設が別の場所に移動したりということも起きますので、定期的に、地図が作り替えられるということが行われていました。これは、アメリカの国立公文書館で発見した地図ですけれども（図４）、ちょっと字が小さくて、わかりづらいですが、東京駅と皇居がありまして、その

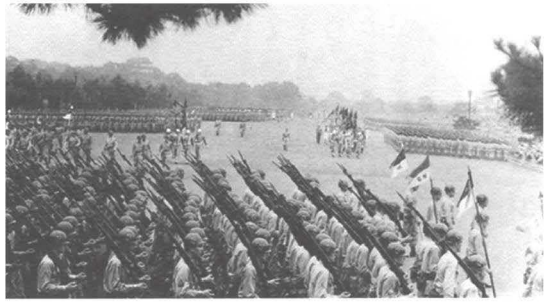


図３　皇居前広場でのパレード（S22.7.4）

前にＧＨＱ本部がある。この丸の内一帯はほとんどと言っていいと思うんですけど、オフィスビルはＧＨＱ関連の建物として接収されていました。皇居の西側に官庁街が広がっていて、そちらのほうにもアクセスしやすいという、大変、機能的な場所ということもあって、ここに本部が置かれたと考えられます。この地図でおもしろいのは、ストリートに英語名が書かれていて、チャペルロードとか「AVE A」「AVE B」とか、「1ST ST」とかいうかたちで、自分達がわかりやすいように名前を付けていることです。新橋の駅前に「タイムズスクエア」という看板が出されたりしていました。それは占領軍のための看板で、英語表記の看板が町中に溢れることになりました。先ほどの明治生命館は、極東空軍の司令部があった場所です。ここにジープが置かれていますけど、大体、ビルに横付けするような格好です。

もう一つ、占領下の都市を見る時、接収する時に何が基準になっているのかというところが気になります。東京に

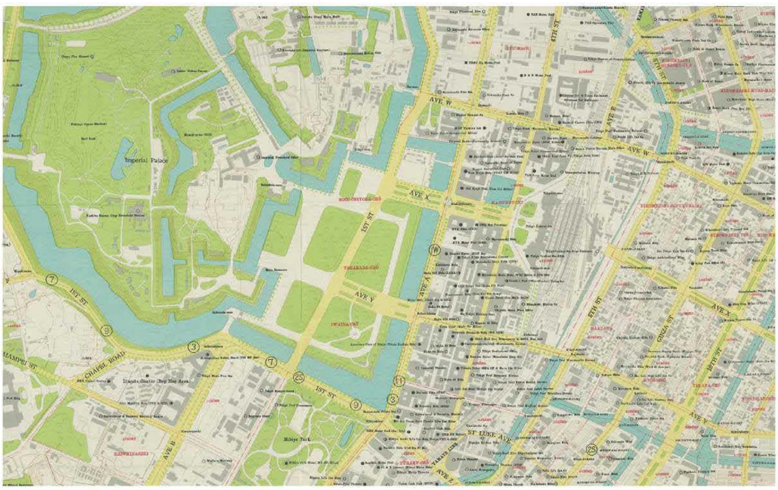


図４　「Tokyo City Plan」1948年発行

は、実はこういうような練兵場とか軍事関係の場所が点在していましたので、そこが主に接収されていることがわかっています。例えば、先ほど挙げた代々木の練兵場が新しい住宅のディペンデント・ハウジングエリアとなるわけです。そういう軍事関係の広い空間に、いち早く占領軍が進駐してくるということになります。

代々木の場合はオリンピック会場として使用するときに接収が解除されます。接収地の跡地利用としてオリンピック会場が建設されたのです。そういうことが他のところでも起きています。場合によっては、いわゆる軍事的な空間の解体を目指して、跡地が払い下げというかたちで行われることもあったわけです。

ワシントンハイツは大規模な住宅地でして、アメリカ軍の家族が住むための住宅ということで、建物はそんなに大きなものではないんですけれども、建物の間、棟間隔というのはものすごくゆったりしています（図5）。この建物の敷地、住宅地の敷地は全部、フェンスで覆われていました。中に入れないように監視員がつき、非常に守られた、一種、ここだけがアメリカというような状態になっていました。先ほどの学校施設とかショッピングセンターみたいなものも、あるいは消防署とか、ガソリンスタンドとか、そういうものまで設営されていましたので、ここにいれ

図5　ワシントンハイツ（1947）

ば、こと足りるという状況になっていたわけです。

これらの建物と住宅地には、こういうふうに設計しなさいという指示がありました。ＧＨＱのデザイン部門が、基本図面とか設計指針というものを示しています。例えば、直線道路は避けて、敷地形状から生まれる曲線を中心に道路を計画しましょうというものです。無理に土を削って道を真っすぐ通すというようなことはせずに、敷地の形状に合わせたところに道路を配置し、建物を配置するということをやっていきましょうということですね。軍隊はブルドーザーを持っていますから、その気になればいくらでも真っすぐ通せたと思うのですが、それをしなかった。非常に早く建物を用意する必要があったからだと思われます。既存の状況をいかに使いこなし、それを自分達のライフスタイルに合わせて変えていくかという、そういうところに力を置いていたと考えられます。

もう一つは、建物の配置ですね。これは一戸のように見えますが、この建物は四戸が一棟になった建物です。四戸一ですね。四世帯が入れるようになっている。縦型に区切っているんですけど、一家族が居住する規模としてはそんなに大きくありません。複数戸をユニットとして建てて、効率化を図る。工期短縮も関係してくるわけですけども、早く作るということをやります。

もう一つは区画割り、宅地を割らない。フェンスも何もない、ただ家がぽつんと、植栽はちょっとありますけれども、それだけになっている。これもアメリカの当時の住宅地開発の手法をそのまま持ってきたようなかたちになっています。単身世帯、二人世帯、四人世帯のタイプがあり、パターンを幾つか用意していました。それはさっき言ったＧＨＱデザインブランチが図面を用意していました。室内は非

常にシンプルです。これは二階建てですけれども、玄関に入るといきなりリビングで、ダイニングにつながり、その裏がすぐキッチン。上がると寝室です。これは一つのユニットですから、規模としては非常に小さいですね。室内はこんな状態で、アメリカで流行っていた家具、あるいは家財道具が輸入される場合もあったんですが、実は日本で生産された家具がおかれていました。特に、家具の場合は工業技術試験所で、ＧＨＱデザイン部門の指示の通りに作られていくようになります。そういう意味では、アメリカのライフスタイルを目の当たりにするというインパクトを受けています。洗濯機とかキッチン用品は当然、日本で作られるんですけども、アメリカの製品等が持ち込まれることもありました。

もう一つ、当時よく見かけた建築タイプとしてあるのは、このかまぼこ型兵舎です。非常に軽く、クレーンでつり上げて下ろして配置するだけで良いということもあって、非常にいろんなところで使われていました。皇居の近くにパレスハイツというのがあったんですけど、そこには新築で建てるまでに、こういうかまぼこ型兵舎を並べて、すぐに寝ることができるようにするということをやっていました。アメリカではこれがプレファブリケーションの住宅として活用されていて、これを加工して住みこなすというそんな本も出ているぐらいで、一つのブームを起こしました。神戸ベースにもこのタイプの住宅が置かれていた場所があります。

もう少し本格的な建物のほうを見てみましょう。ホテルは真っ先に接収される場所です。ホテルは西洋風のライフスタイルを営めるように設計されていますので、まず入りやすいというのがありますね。東京の場合、帝国ホテルが真っ先に接収されました。アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトが設計

したものでしたので、ここにはたくさんの人が当然入っていました。そのほかにも、アメリカ人建築家のウィリアム・メレル・ヴォーリズの作品も多く接収されました。ヴォーリズは東京でアパートを作っていました。このアパートはスパニッシュスタイルで、ヴォーリズが得意とした様式です。もう一つ、特徴的なのは、鉄筋コンクリート造であったことです。ヴォーリズはスパニッシュの様式の鉄筋コンクリート造のアパートを東京に建てた第一人者と言ってもいいかもしれません。これを占領軍が宿舎としたいと思うのは理解できます。

それから、先ほどのライトはアメリカ近代建築の巨匠で、非常に個性のある作風で芦屋にも遺構が残っています。そういうものは非常に個性的だけれども、モダニズムの旗手から見れば、若干世代が上になります。ライトの弟子たちが非常にうまくモダニズムの建築を作っていく。そのうちの一人が土浦亀城という人です。この人は東京大学の出身ですが、帝国ホテルの建設でライトが来日して、ライトがアメリカに帰国するときに合わせて渡米します。もう一人ライトに弟子入りした日本人がいます。後でご紹介する遠藤新がそうです。彼も同じように東京大学で建築を学んでいた時に、帝国ホテルを見て衝撃を受けて、アメリカに渡ってライトの事務所に入ります。遠藤はライトの作風に沿った作品を作っていきます。一方、土浦亀城はライトの作風から離れた人としても知られていて、どちらかというと、ドイツのバウハウスの傾向に近いような住宅を次々と手がけていきます。この野々宮アパートは、さっきのヴォーリズのものとは違って非常に近代的で、モダニズムの意匠になっています。

このようなホテル、アパート、それから寮のようなものにまず占領軍が入るわけですけど、職位によっ

て住む場所が違う。あるいは女性か男性か、白人が黒人かで、住む場所が違います。建物のランクや規模によって使用方法を変えていたということがわかっています。

これはアメリカの公文書館に残されている写真です（図6）。毎年アメリカに行って、写真や文書を複写する作業を進めています。東京の場合、こういう様々なスタイルの住宅が接収されていました。先ほどありました、スパニッシュ・スタイルもあれば、歴史様式のようなものもあります。ハーフティンバーと言われるようなスタイルの住宅もあります。この住宅はいわゆるインターナショナル・スタイルと言われていたものですけども、そういうものも接収されています。このように様々なタイプの住宅が積極的に接収されていた様子がわかります。このような住宅が好まれた理由はもう一つあります。こういう大邸宅には、下水道、上

東京都内の接収住宅：歴史様式、ハーフティンバー様式、スパニッシュ様式、国際様式など様々。東京都内だけで一千戸以上の住宅が接収された。

図6　東京都内の接収住宅の建築様式

水道が完備されている。アメリカ軍はすごく衛生面に対して気を使っていたので、トイレがくみ取り式だったら、接収されないという判断になっていたようです。

ここで、前に貼り出しているものを紹介しておきます。これは西宮市を写した絵図で、鳴尾の競馬場があった時のものです。それから、こちらにある白い大きな地図は占領軍が作成した接収地図です。神戸市の文書館に所蔵されているものですけども、西のほうは塩屋から東のほうは甲子園、鳴尾の辺りまでをカバーした地図です。これについては、あとでスライドで少し解説を加えたいと思いますが、見比べていただくとわかりやすいということで、ここにお持ちしました。絵図のほうは西宮市の郷土資料館にはもっと大きいものがあるんですけれども、少し縮小したものを掲示しています。

東京の話を中心に、大雑把ですが、建物、ホテル、住宅、港湾施設等が接収されていったこと、多数の軍隊がやってきて、接収を進めていくということだけは簡単にご説明しました。次に、神戸を含む阪神地区はどうだったかというところに少し話を移していきたいと思います。特に西宮の場合、神戸もそうですけれども、海側の被害が大きかったことがわかっています。空襲は軍需工場や軍事施設などが重点的に狙われていました。西宮の場合は五月に一回、六月に二回、七月に一回、八月に二日に分けて、空襲しています。そのなかでも軍需工場に関わるような部分がやはり被災しています。とはいえ、被災をまぬがれたものもあります。繊維関係の会社や鐘淵機械工業、甲子園ホテル、これは戦中から日本海軍が使っていたということでも知られていますけれども、あと新明和などの一部が残っているところがありまして、そういうものも積極的に接収していきます。最初は狙って破壊するわけですが、破壊し損

ねたものは接収すると、そういう傾向はあると思います。

被災した場所を西宮市史から抜粋したものがこちらです。やっぱり海岸線に沿って被災しています。今、この辺りが西宮市ですけども、一帯が空襲で焼けて、焼け野原となったということはわかっています。この辺りに少し広い場所があるんですけど、それは飛行場があったところですね。宝塚ですけど、川西航空機が戦闘機を作っていと言われています。工場があったところが集中的に焼けています。この辺りが仁川ですね。この辺りは鳴尾の飛行場があった場所です。ということで、わかりやすいかたちで被害が出ています。

この時期、空中写真は米軍が撮っています。一九四六年と一九四八年ぐらいに撮影されたものが多いのですが、写真で見る限り、海側の建物は焼失しています。建物がほとんどなく、被災状況は一目瞭然です。この辺りは御前浜で、夙川です。今、私たちがいる周辺の住宅地は残っているけど、こちらは、海側の部分は焼け野原という、まさにそんな状況です。甲子園のほうに目を移しますと、やはりこの辺りもほとんど建物が見当たりません。もちろん、田畑も分布し、建物が密に建っていないところもあります。ちなみに、ここに繊維関係の会社がありました。今はありませんけど、アサヒビールの工場になり、今ではそのビール工場もなくなって空き地になっているところです。この甲子園の西側の写真がこちらです。建物があったであろう場所に建物がなくなっている様子が見て取れます。酒蔵が結構な被害を受けたということは記録としてあるんですけれども、その辺りの場所ですね。西宮市史には甲子園補助飛行場と記録されています。川西航空の鳴尾工場という記述もありますが、その部分に建物らしきも

のが建っています。これは、実はかまぼこ形の兵舎が並んでいる様子を示しています。写真がこれだけではわかりづらいですが、この用地が接収されて、一つのキャンプ地になっていたことがわかります。

西宮の空中写真で少し様子をつかんだ上で、都市の中を見ていきます。焼け残ったものも当然ありました。これは『西宮という街』という、去年の十二月に西宮市が発行した写真集から拝借してまいりました。これは西宮の回生病院です。最近まで、この門が残っていたのですが、撤去されてしまうということで、ニュースになりました。建物自体は御前浜の浜側のほうにあって、洋風の外観をしています。屋根に和風な瓦が載っているので、洋風化を進めた近代建築と位置付けることができます。それともう一つ、残っていたのは、鉄筋コンクリートで造られていたこともあるんでしょうけれども、県立の西宮病院になっているところに建っていました。いわゆるインターナショナル・スタイルといわれるようなものですけど、設計したのは兵庫県の営繕課です。当時の営繕課は地味ながら名建築を造っていました。現在の営繕課ではこういう建物の設計自体はほとんどやらないと聞いていますけれども、当時はこういうものを次々と手がけていた。結構、時代にも敏感で新しいものを造っていたということがわかっています。そんなようなものが残っていたぐらいで、他の病院等は焼けたり、使えなくなったりしました。そのため、ここに被災した人たちが集中したという記録が残っています。

占領下の西宮に連合軍の人々が大勢押し寄せてきます。軍隊は和歌山から入り、電車で三宮に移動し、そこから今度は西宮や宝塚、姫路のほうへと部隊が分かれて進駐するという流れです。連合軍の神戸の本部は、居留地の神港ビルにありました。ここが本部で、神戸の基地関係を事務処理等を司るオフィス

として使われていました。神戸も東京や横浜と変わらず、港湾施設にたくさん人が入っていきます。湾岸通りにある主要なビルはほとんど接収されていたという記録が、神戸市史にも残っています。それ以外に、宿舎ですね。ホテルを接収するのは、やっぱり神戸でも同じでした。西宮も同様です。

次に戸建住宅ですが、やはり阪神間の個人所有の住宅を接収していきます。一気に住宅を確保しなければいけないということで、阪神間は邸宅がいっぱいありましたから、そういうものを中心に接収されていきます。占領軍調達史という調達局が作った資料に、全国接収土地建物契約状況（一九四八年現在）というのがあるんですけれども、その資料によれば、全国で接収された建物が三七〇〇件、土地が七五八〇件余りで、兵庫県の場合、建物が四六六件ほど接収されていたということが記録としてあります。兵庫県にはその資料があるのかないのかちょっと、兵庫県の文書課に聞いてもわからなかったので確証はありません。調達庁の調べでいくと、この数字になります。なかなか、件数としては大きいですね。

もう一つはホテルですが、これについては、神戸大学の村上しほりさんがまとめておられます。村上さんの論文によれば、オリエンタルホテルとか、富士ホテル、グロスターハウス等が接収されています。これはアメリカで見つけた写真ですが、神戸のオリエンタルホテルが焼けている写真が残っていました。トーアホテルもその後、焼けてしまうので、今は見ることができませんが、この洋風のホテルが接収されていたことはわかっています。あと、グロスターハウスですね。これも宿舎として接収されています。昔のオリエンタルホテルが今も残っていたら、すごく歴史的価値が高く評価されると思います。設計者

はヤン・レツェルという人で、現・原爆ドーム（旧広島県物産陳列館）を設計した人です。

写真がはっきりしたものが残ってなくて、わかりづらくて申し訳ありません。神戸では、次々とホテルが接収されており、西宮も例外ではありません。あとでまた、西宮のホテルの話は写真に出てきます。これは武庫川女子大学の七〇年史に掲載されていたものですけども、奥に鳴尾の飛行場が見えます。手前に甲子園球場があって、ここは元々競馬場だったときの建物が残っています。今は武庫川女子大学の校舎として使われている建物です。この競馬場の空間は飛行場として利用されて、後に、ここにかまぼこ型兵舎が並ぶという状況に変わっていきます。今は武庫川女子大学建築学科の先生が、この建物を修復なさって、現在は、中学校、高校の芸術館として利用されています。大林組の施工で、いわゆるモダニズムの建築です。そのほか、よく知られているのが、甲子園ホテルです。甲子園ホテルは、先ほどのフランク・ロイド・ライトの弟子である遠藤新が設計したもので、ライトの帝国ホテルによく似ている。ライト式建築というふうにも呼ばれたりしますが、ライトの影響を色濃く出している建物です。武庫川女子大学が払い下げを受けて、建築学科の校舎として利用しているものですね。西の甲子園ホテル、東の帝国ホテルという評判で、有名だった建物です。

図7　ホテル・パインクレスト（昭和5年竣工）　出典：『近代建築画譜』

ちょっと変わったものを紹介しておきます。甲陽中学校です。これは、一年ほどで接収解除となります。学校建築は接収されることが少ないんですが、接収されました。これは竹中工務店が設計しているもので、ガラスのこの階段のところが非常に美しい。中が透けてみえるモダンなデザインです。これも、コンクリート造で、焼けずに残っていました。あと、西宮の球場も実は接収されていたんですけど、これも比較的早く接収解除となります。甲子園球場は、しばらく接収されているんですけれども。

芦屋にちょっとだけ触れておきますと、六麓荘に建っていた国際ホテルが接収されています。これもいわゆる本格的なモダニズムの建築です。六麓荘に住宅を構えて移動するとなると、ちょっと車がないと無理です。西宮だけじゃなくて、その隣接する芦屋のほうのこういうホテルが一つ、宿舎となっていました。そして、この夙川に建っていたホテル・パインクレストですね（図7）。こ

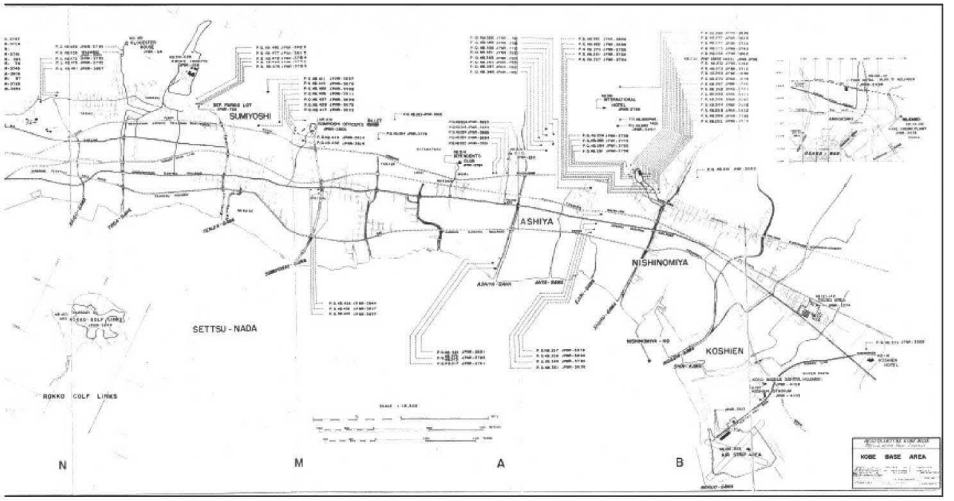
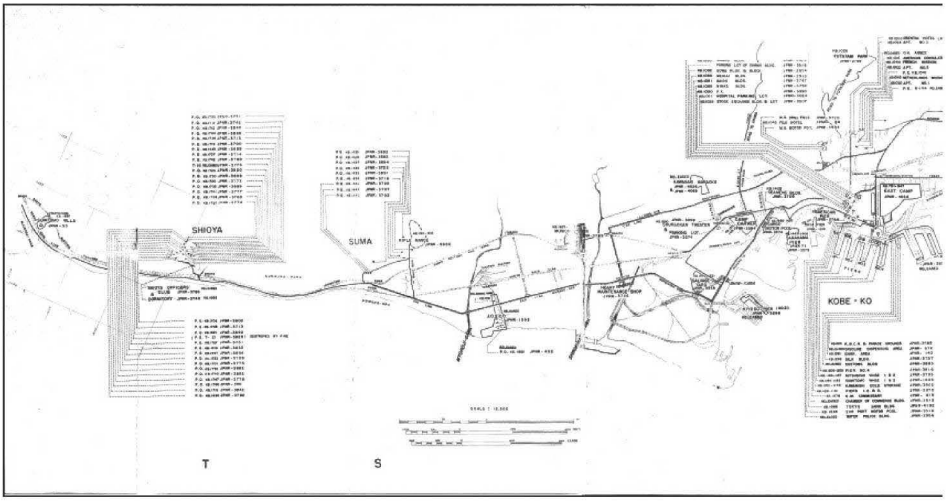


図8 「Kobe Base Area」(1949) 神戸市文書館所蔵

れは、今はありませんけれども、夙川駅の北側に建っていたホテルアパートメントという言い方をするような建物です。これは長期の滞在用の安いホテルとして機能していて、当初から外国の人たちがたくさん利用していたホテルでした。接収対象にするにはちょうどいいわけです。これも接収されています。

ここで先ほどの接収地図に戻ります。これは一九四九年十一月の記録です（図8）。実はこの建物の接収は、時期によって解除されている場合もありますし、あとから再度接収されるというケースもあるので、ある時点でしか、記録はできないことをご了解ください。一九四九年の時点の記録として、神戸ベースエリアの接収地図としてご覧ください。これが先ほどの飛行場の部分ですね。その飛行場の横に建っている建物も接収の対象になっていました。先ほどの武庫川女子大学付属の中学・高校の建物になっているものですね。それから、甲子園球場、甲陽中学校、それから、甲子園ホテルですね。ここに



「TSUDO　AREA」と書かれていますが、ここは何に使われていたのか、記録が見つけられていないんですけれども、ここは繊維関係の工場があった場所だと思います。西宮市史には「ツドショップ」と書いてありますけども。それからこの辺りには、ちょっと場所がはっきりわからないですけども、こういう兵隊がいた場所もあったようです。

そして、こちらの夙川ですね。夙川駅の北側に伸びるの道があり、パインクレストホテルがその先にありました。この周辺一帯が集中的に接収されていたことがわかります。西宮市史の記録と比較すると、大神中央土地株式会社の所有になっていたことが分かります。大神中央はこの一帯を開発した会社ですが、そこが社宅や貸家の所有者になっていた。それ以外にも、この辺り、苦楽園にも接収住宅はありました。芦屋の国際ホテルも接収されていました。それからこの辺りですね。夙川には建築家の安井武雄の自宅などもありました。それは、この辺り一帯、集中的に接収されたエリアにありました。この地図からもすぐにわかります。

芦屋の海側のほうにも幾つかあります。この辺りにもあるんですけど、芦屋は詳しい記録がないのでよくわかりません。それから神戸の中心部ですね。イーストキャンプとキャンプハーバーというのが、この三宮と神戸のところにあるわけですけど、その港湾施設関係が全部と接収されています。山手に六甲ハイツがあります。これは現在、神戸大学がある場所で、先ほどのワシントンハイツのような住宅が建ち並んでいた場所としてありました。その後、大学のキャンパスとして利用されています。九州大学も同じように、ディペンデント・ハウジングエリアとして使われていた場所が九州大学のキャンパスに

なっていたりします。いろんなところでそういう利用の仕方、国が国関係の施設に変えていくことになります。それが自衛隊の駐屯地になっていく場合もあれば、防衛関係の施設とは異なるものに置き換わるケースがあります。こちらには、住吉、御影の邸宅があって、やはりたくさん接収されていたことが見てとれます。

圧倒的なのは塩屋です。塩屋は「ジェームス山」と言われる、外国人専用の住宅地区がありましたので、ここは常に接収された状態で、何度か部隊が入れ替わっています。記録はまだ確認できていないですけど、オーストリア軍もここにしばらくいたようです。あとは須磨の別荘街のところですね。あの辺りもかなりの数が接収されています。ですけども、こうやって見ますと、塩屋と住吉、御影、そして、この夙川は接収住宅が集中していた地域ということがわかります。この地図には載っていないんですけど、仁川にもたくさんありまして、雲雀丘とか宝塚のほうですね。あちらは、伊丹ベースのための接収施設なので、この地図には入っていません。阪神間エリアで特別に開発された住宅地の住宅が集中的に接収されている傾向が読み取れます。

西宮の接収住宅データを大神中央土地株式会社が出している地図にプロットしてみました。「夙川香櫨園経営住宅案内図」というのは、大正末期に作られたものです。夙川駅がここにあって、少し道ができたかなという状態ですね。それが昭和三年になると、少し道路が広くなったりとか、広がっていくのが見て取れます（図9）。昭和六年になると、たくさん住宅が建っているのが見えます。ここに書いてあるのはパインクレストホテルですね。パインクレストホテルの周辺にある建物が多く接収されています。周

辺にあるものというのは何だったのかについては大阪芸術大学の山形政昭先生が明らかにされています。この辺に外国人企業の社宅がありました。ここにゼネラル・モーターズ、ここにナショナル・シティ銀行の社宅があって、しかも、こちらのほうにはアメリカの宣教師たちの住宅等がありました。それでここはアメリカ村と呼ばれていました。その意味では、さっきの塩屋の外国人住宅地とよく似た状況を呈していたということが言えます。しかも、アメリカ企業の社宅を接収していたことがわかってくるわけですね。ちょうどいい場所に、ちょうどいいものがあったから接収されたのか、協力を得やすいからそうしたのかということは記録がないのでわからないんですけども、そういう外国人を受け入れやすい場所でした。しかもここは上下水道が整備されていたので、衛生面からも条件と合致していたので、接収されたので

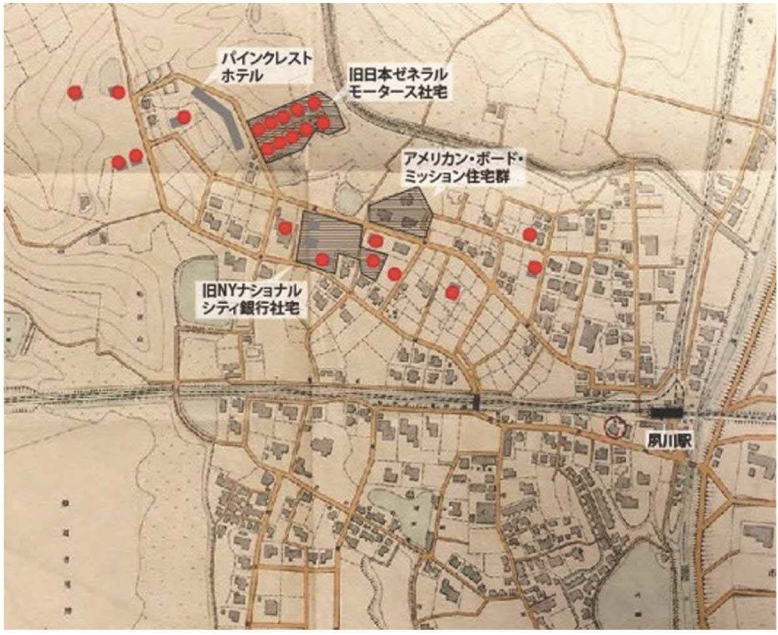


図９　夙川の住宅地における接収住宅

はないかと考えることができます。

坂本勝比古先生のご研究によれば、大神土地株式会社の記録業務報告書には、「外人住宅、賃貸契約又ハ土地の分譲方ニ関シ商談ノ成立シタルモノノ内ニハ、ナショナル・シティ銀行、日本ウェスチング・ハウス電気株式会社等アリ、之ニ既設ノ、インターナショナル・ゼネラル電気株式会社、日本ゼネラル・モーターズ株式会社ノ幹部住宅」とあり、夙川がアメリカでも最大級の企業の社宅街になっていたことが、この記録からもわかります。

パインクレストホテルも、外国人向けにちゃんと英語表記でパンフレットを作っていたりして、ここも多くの外国人が、接収される前から使っていた場所でした。ホテルとその周辺の環境等をひっくるめると、外国人住宅地に近いような状況だったということがわかります。ここに、夙川住宅地の広告があるんですけど、上下水道、ガスが完備されて、健康的な住宅地であるということを売りにしています。大神中央土地の宣伝文句がこのような状況だったんですね。非常に条件が整った場所だったということがわかります。

こちらの写真は建築家・安井武雄の自邸です。彼は安井建築設計事務所を立ち上げた人で、今もあります。夙川にあった建物はもうなくなってしまいましたが、鉄筋コンクリート造の端正なモダニズムの建築でした。安井武雄の自宅も接収の対象になっていました。当然ながら、洋風のライフスタイルが実現できる空間を持っていたわけです。それから、その近くに谷邸がありました。これを設計したのは上野伊三郎という人でして、日本インターナショナル建築会という、当時、建築の新しい運動を起こした

グループのメンバーでした。京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）の建築の教授、本野精吾がいました。上野伊三郎はウィーンでデザインを学んで帰ってきて京都市立芸術大学の教授となった建築家です。帰国後、ヨーロッパ仕込みのデザインを実践しています。モダンな住宅が、まだ日本には十分広まってない段階で、鉄筋コンクリートで、国際的な建築言語を使って作っています。しかも、地方性（ローカリティ）を大事にせよというのが日本インターナショナル建築会のテーゼでしたので、和風建築のように庇（ひさし）を結構出して、モダンな造形言語を気候風土に合わせるというようなデザインを見せています。当時のヨーロッパのモダニズム建築にこういう庇はついていません。京都にも同じく本野精吾がコンクリートブロック造の庇をつけた住宅を作っています。どちらも接収されています。

ナショナル・シティ銀行の社宅を作ったのはW・M・ヴォーリズです。彼が得意とするスパニッシュ・スタイルで作っていまして、やはり洋風の住宅です。接収されたのは、すぐに入居できたからだと考えられます。付近の住人への聞き取りからは確かな情報は出てきませんでしたが、こういうものがずらずらと並んでいたんではないかと考えることができます。

最後に、神戸市塩屋の接収住宅についてお話しします。一九四六年十一月の地図、航空写真、空中写真に、洋館がどれだけ建っていたのかをプロットしたものがこちらです（図10）。これはジェームス山と呼ばれている場所で、ここにジェームス邸があります。その横にロバート・ヤング邸とか、この辺りに旧牛馬邸とか、洋館が建ち並んでいました。最近、洋館が次々と取り壊しになったので知られています。現在はマンションが建っています。しかし塩屋では外国人向けに開発された住宅というものを積極的に

接収したようです。ジェームス邸の隣には、米軍の将校クラブが新たに造られました。ジェームス邸には大きな手が加えられていなかったので、当初の状況を今も見ることができます。ジェームス邸は、竹中工務店の建築家が設計したものですが、やっぱりスパニッシュ・スタイルです。阪神間はスパニッシュ・スタイルがよく似合うと言われます。当時、ハーフティンバーとスパニッシュが二つ新しい住宅様式として日本に入ってくるんですが、ここではスパニッシュを採用しています。

以上、研究途上の話を含めて、お話しをさせていただきました。東京で起きていたことが地方でどういうふうに展開していったのかという問いに、自分としては興味があります。京都の場合、御所に先ほどの占領軍家族住宅を作るという話が持ち上がったとき、市民はあわてて連合軍に建設中止の陳情を出しました。その結果、御所での建設は中止となり、植物園に建設す

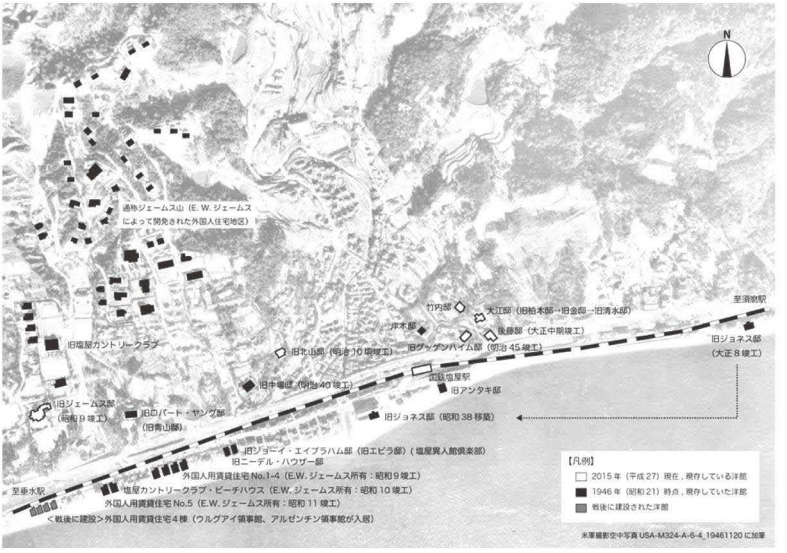


図10　神戸市塩屋地区における洋館の分布（1946）

るという話になります。四条烏丸の中心部にアクセスしやすいところを中心に接収されたという事実もわかってきていますし、滋賀県の大津キャンプとのつながりがあって、大津にアクセスしやすいところを中心的に接収されています。その他の地方でも、何らかの事情があって、集中的に接収されている場所がありそうです。各地の研究をさらに進めて、また続きのお話をできたらなと思っております。本日はありがとうございました。

※図版出典は特記なきものはすべて米国国立公文書館所蔵。

【プロフィール】※二〇一六年度現在

大手前大学メディア・芸術学部准教授。専門は近代建築史。米国の近代住宅に関する研究および日米間の建築文化交流に関する研究に従事。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了［博士（学術）］。米国コロンビア大学客員研究員、京都工芸繊維大学特任助教を経て現職に至る。

《翻訳書》『近代建築保存の技法』テオドール・H・M・プルードン著、玉田浩之訳（鹿島出版会2012）
『ラルフ・アースキンの建築：人間性の追求』ピーター・コリーモア著、玉田浩之共訳（鹿島出版会2008）。

《論文》「占領下西宮における接収住宅に関する研究（日本近代：接収住宅・装飾、建築歴史・意匠、学術講演会・建築デザイン発表会）」（『学術講演梗概集（建築歴史・意匠）』691－692,2015）
「占領軍による接収住宅と接収施設地図の建築史的分析（特集 占領期京都を考える）」（『アリーナ＝Arena(15)』26-35,2013）